【タジキスタン】

ロシアへの複雑な思い

岡田晃枝

中央アジア[*1]の平原を疾走する機関車。車窓から見えるモノクロの景色の中、たてがみを風に躍らせながら機関車を悠然と追い抜いてゆく野生の馬の群れ。土を食べるという奇妙なクセを持つ愛らしい少年と、その少年を見守る兄。「ソ連映画」ではなく「タジキスタン映画」として日本に初めて紹介されたのは、そんな映画だった。バフティヤル・フドイナザーロフ監督の『少年、機関車に乗る』である。マンハイム映画祭やトリノ映画祭でのグランプリ獲得のほか、有名な国際映画祭で数々の賞を受賞したこの映画は、日本の映画ファンにも強い印象を与えた。

ソ連崩壊と内戦

タジキスタン共和国（以下、「タジキスタン」）は、一九九一年九月に共和国独立を宣言、一二月のソ連崩壊に伴って独立国として国際社会に認められた若い国である。先に挙げた『少年、機関車に乗る』は一九九一年の制作で、実質的にはソ連の体制下で作られた映画だ。ソ連は国策として映画制作にも力を入れており、人材も資金も（そしてノルマも）備わっていた。

しかし、旧ソ連諸国の中で最貧国のタジキスタンには、ソ連時代に行われていた文化政策を引き継ぐような資金は当然ながらなく、[*2]しかもタジキスタンは間もなく内戦に突入する。独立後ほどなくして国家建設の方向性と政権・利権の掌握をめぐって国内に大きな対立が起こり、一九九二年五月にはそれが武力衝突、そして内戦へと発展していった。一九九七年に停戦合意に至ったが、その翌年、国連PKOの政務官として現地に赴いた中央アジアの若手有力研究者の一人、秋野豊氏が凶弾に倒れたことは日本で大きく報道された。このような状況下で、一九九一年当時制作途中だった映画の多くが仕上げられず、また、映画監督や俳優たちがタジキスタン国内で引き続き活躍することは困難となってしまった。たとえばジャムシェド・ウスモノフ監

督の短編映画『井戸』がそうだ。彼がモスクワでともに映画を学んだ韓国のミン・ビョンフン監督とともに一九九八年に制作した『蜂の飛行』が世界で認められ、それによって得られた資金で二〇〇〇年にようやく完成した。ウスモノフ監督は、その後、『右肩の天使』（二〇〇二）、『天国へ行くにはまず死すべし』（二〇〇六）と秀作を快調に世に送り出している。

しかし、少数の映画人たちは努力を続け、珠玉の映画の数々を生み出す。『少年、機関車に乗る』のフドイナザーロフ監督は、内戦のさなかに『コシュ・バ・コシュ：恋はロープウェイに乗って』を制作した。荒廃した首都ドゥシャンベで博打に興じる男たち。バックにこだまする乾いた銃声や、川を流れてくる迷彩服を着た死体は、のっけから「非常事態」を印象づける。しだいに激しくなる内戦を背景にしながらも、この映画の中心人物たちは戦闘には参加していない市民であり、主題はロープウェイの操縦士とモスクワ帰りの洗練された女性のラブロマンスである。フドイナザーロフ監督は、内戦終結後の一九九九年にフェルガナ盆地に幻想的なセットを組みあげて壮大なスケールで制作した『ルナ・パパ』で世界的に有名になった。ロシアやヨーロッパを拠点として、その後も活躍している。

ロシアとロシア人——屈折する思い

『コシュ・バ・コシュ』のクレジットには、「ロシア二〇一部隊」[*3]への謝辞が明記されている。夜間の砲撃など、いくつかのシーンは実際の戦闘を撮ったものではなく、展開中の軍に協力して再現してもらったものだという。[*4] 内戦勃発時にドゥシャンベに展開していた同師団は、内戦において平和創設、平和維持の役割を果たした。[*5] タジキスタンはアフガニスタンと非常に長い国境を接しており、ソ連時代はその国境を「ソ連軍」が守っていた。軍事的に非常に守りにくい険しい山地がその大半を占めており、人口も少なく経済的にも困窮し、さらに内戦で疲弊したタジキスタンには、「ソ連軍」を引き継いだ「ロシア軍」を撤退させて自前の軍だけでその国境を守るのは不可能であった。タジキスタンは、首都の警備も含め、ロシアからの軍事的な協力を得ざるをえない。[*6] 小さな中央アジアの国々にとって、ロシアとの関係はプラスの意味でもマイナスの意味でも非常に重要である。

ソ連崩壊直後は、そのような状況と、ロシアのエリツィン大統領の「近い外国」政策、[*7] そしてロシアに代わって中央アジアに関心を示す中国、米国、トルコ、イラン等の大国の思惑を指すのに、「新しいグレートゲーム」のような表現が頻繁に使われた。つまり、大国が中央アジアを場として勢力圏争いを繰り広げているイメージである。しかし

現在では、小国の側が複数の大国の関心を天秤にかけてうまく援助を引きだしている、つまり中央アジアの国々の外交の主体性にも注目した見方が一般的になってきた。とくにアフガニスタンからの麻薬流出の最大のルートであることもあり、欧米もロシアもタジキスタンを見捨てることは想定できない。今後のアフガニスタン情勢の変化、とくに米軍の撤退による地域全体の治安の悪化の可能性をタジキスタンがどのように外交カードとして利用してゆくかが注目される。

ここでまた映画にもどろう。『コシュ・バ・コシュ』の主人公ミラは、母の住むモスクワから父の住むドゥシャンベに久しぶりに帰ってきた女性である。この先進的な教育を受けてファッションも髪型も洗練された「モスクワ帰り」の娘が父親が博打で作った借金のかたに取られそうになるところからドラマははじまる。当然、娘を自分のモノとして扱うような非道な仕打ちにミラは激怒し、父親に強く反発する。彼女に強く惹かれる地元の青年ダレル（もう一方の主人公）は、非常に強い家父長制と男尊女卑のタジキスタン社会で生まれ育ってきたため、愛しているにもかかわらず、彼女の気持ちを受け止めて理解することができない。憧れ、惹かれ、手を伸ばすけれど別世界。それがドゥシャンベから見たモスクワだと言ってよいであろう。

もう一つロシア人が非常に重要な役割を果たす映画がある。『トゥルー・ヌーン』である。この映画を監督したのは、フドイナザーロフ監督のもとで助監督として映画作りに関わるなどしてきたノシール・サイードフで、これが自ら監督を務める初めての長編映画となる。ソ連崩壊前後のウズベキスタンとの国境の村が舞台で、病院や学校などの公的サービスやインフラを共有し、頻繁に行き来してきた二つの村、「上」サフェド村と「下」サフェド村の間に、村人たちが状況を把握できないままに国境が設けられてしまう。「上」村に住むニルファは、「下」村に住むアジズに嫁ぐ日を目前にしていた。しかし国境には鉄条網が施され、それを破って行き来しようとする村人を止めるために、軍は地雷まで持ち出した。ここでニルファを支え、彼女が無事に嫁げるように手助けしたのは、彼女が働く気象観測所に駐在しているロシア人キリルであった。

『コシュ・バ・コシュ』のミラに対するドゥシャンベの人々と同じく、『トゥルー・ヌーン』の中にはキリルのもとで働くニルファを「ロシアかぶれ」などと評して奇人扱いする人もいる。キリルをあからさまによそ者扱いする人もいる。しかしもう一方で、たとえばニルファの父親は、ロバや馬が主な交通手段である村の中でバイクを持っていることが自慢でありながら、ごく初歩的な修理もできず、調子が悪くなったらキリルに頼んで直してもらうなど、村人たちは技術的な（鉄条網を切るといったものも含めて）

困りごとはすべてキリルに解決してもらっている状況であった。ロシア人に対する村人たちの屈折した気持ちがそこに表れている。なお、この映画の中のキリルは、地雷探知機を手近にある材料だけで一晩で作ってしまうようなスーパーマンとして描かれているのが興味深い。急こう配の斜面に貼りつくように存在し、ラジオの電波も満足に入って来ない外から閉ざされた村。ロシアから来たたった一人の技術者に頼らなければ文明的な機械を使いこなせない、そんな村。もしキリルがいなくなったらこの村はどうなってしまうのだろう。

ソ連時代、キリルのようにロシアから技術者や医者、教師といった専門的知識を持った者として派遣され、各共和国に駐在していたロシア人は非常にたくさんいた。中には駐在が長くなり、そのまま家族を呼んで定住する者もあった。ソ連が崩壊したあと、派遣されていた技術者等の専門家の多くはロシアに引き揚げて行ったが、中にはさまざまな事情で帰国できないロシア人やロシア人家族も多かった。バルト三国に代表されるように、独立した新しい共和国の政策によっては、彼らは居住国の国籍をもらうための条件を満たせず、無国籍者が大量に出る可能性が生じた。そのような人道的危機に、ロシアは、ソ連の国籍を持っていた人には希望すればロシアの国籍を与えるという政策を取って対処し、また、可能なかぎり多くの旧ソ連諸国と二重国籍条項を備えた条約を結ぼうとした。ロシアに引き揚げて行った人々の中には、もとの家に戻って家族と幸せな余生を過ごした人もいれば、ロシアの中に居場所を見つけられず、Uターンせざるをえない人々もいた。

『トゥルー・ヌーン』は、ある日突然国境ができてしまって右往左往する人々のドラマであるが、キリルをキーとして、ロシアとの関係、残留ロシア人とローカルなコミュニティの人々の関係に思いをはせるのも面白いのではないだろうか。

独立の光と影

タジキスタンの映画は少ないながらも、国際的な場で高く評価されたものがいくつもある。日本でも東京フィルメックスなどがアジアの映画を掘り起こす役割を積極的に担っており、そこでタジキスタンをはじめとする一般の日本人にとってなじみのない国の映画に触れる機会ができることは、作った側にとっても、そして我々日本にとってもよいことであろう。

ソ連崩壊で他の豊かな地域から切り離され、非常に貧しい国として国際社会に放り出されたタジキスタン。独立して新しい国を作ろうとしたところで内戦が勃発し、新しい時代を期待した市民は裏切られることになった。人口の一％を失ってようやく内戦が終結し、もう一度新しい国づくりを始めて一五年が経った。いったんは反体制派を含めた民主的な政府・議会を作ったにもかかわらず、近年目に見えてラフモン大統領の出身地域の人々による地位の独占が増えてきている。内戦後しばらくの「民主的」傾向は政府によるカモフラージュだったという人たちもいる。今年の終戦記念日の新聞のうちいくつかは、「あの停戦合意はいったい何だったのか」という観点からの特集を組んでいる。独裁者を強烈に風刺したアメリカのコメディ、サシャ・コーエンの『ディクテーター：身元不明でニューヨーク』がタジキスタンでも上映禁止となった。映画に描かれているような純朴で不器用なタジキスタンの人々が、その後のタジキスタンでどのような生活を送ることになるのかが気にかかる。

◉注

＊1 「中央アジア」の定義は一様でなく、ロシアの南部からモンゴル全土、中国の新疆ウイグル自治区、インド北部までの広大な地域を指すこともある。本稿では代表的な定義である旧ソ連の中の五か国、つまり、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンを指す言葉として用いる。

＊2 タジキスタンは、旧ソ連の中で最貧国である。世界銀行の二〇一一年のデータによれば、一人当たりGDPは、同じく旧ソ連最貧国グループのキルギスが一〇七五ドルであるのに対し、九三五ドルである（The World Bank 2012）。

＊3 正式名称は第二〇一自動車化狙撃師団。現在は第二〇一軍事基地（師団級）として、タジキスタンに駐留するロシア陸軍の軍事基地となっている。

＊4 『コシュ・バ・コシュ：恋はロープウェイに乗って』パンフレットより。

＊5 一方で、同師団はじめ、タジキスタン国内に駐留中であったロシア軍からの武器の流出が内戦を激化させたという面も指摘されている。

＊6 二〇一二年一〇月にロシアのプーチン大統領がタジキスタンを訪れ、両国は、ロシア軍の駐留を二〇四二年まで延長することで合意した（Eremenko 2012）。また、経済的な面では、新しいところではタジキスタンの軍装備・技術の近代化のために二億ドルがロシアから援助されるという報道もあった（Карабеков и т.д 2012）。

＊7 ロシア以外の旧ソ連の国々を「近い外国」と呼んで他の「外国」と区別し、ロシアにとって死活的に重要な地域であるからロシアはそこでの国益を積極的に擁護するとした。

◉参考文献

Eremenko, Alexey (2012) "Russia Keeps Tajik Base, Risking Taliban Face-Off". *RIA Novosti* (October 5). http://en.rian.ru/world/20121005/176424262.html（二〇一二年一二月一三日）。
Карабеков, Кабай, Елена Черненко, Иван Сафронов, и Сергей Строкань (2012) Киргизию и Таджикистан вооружат российскими деньгами. Коммерсантъ (6 ноября).

http://www.kommersant.ru/doc/2060903（二〇一二年一二月一三日）。
The World Bank (2012) *World Development Indicators*. http://data.worldbank.org/indicator/（二〇一二年一二月一三日）。

映画リスト

『井戸』……① The Well、②ジャムシェド・ウスモノフ、③二〇〇〇年、④タジキスタン、⑤タジク語、⑥東京フィルメックス（二〇〇〇）。
『コシュ・バ・コシュ：恋はロープウェイに乗って』……① Кош ба Кош／Kosh ba Kosh、②バフティヤル・フドイナザーロフ、③一九九三年、④タジキスタン、ロシア、スイス、ドイツ、日本、⑤タジク語、ロシア語、⑥劇場公開（一九九四）、ビデオ販売。
『少年、機関車に乗る』……①Братан〔弟〕、②バフティヤル・フドイナザーロフ、③一九九一年、④タジキスタン（ソ連）、⑤ロシア語、⑥劇場公開（一九九三）、ビデオ販売。
『ディクテーター　身元不明でニューヨーク』……① The Dictator、②ラリー・チャールズ、③二〇一二年、④アメリカ、⑤英語、⑥劇場公開（二〇一二）。
『天国へ行くにはまず死すべし』……①Бихишт факат барои мурдагон／To Get to Heaven, First You Have to Die、②ジャムシェド・ウスモノフ、③二〇〇六年、④タジキスタン、フランス、⑤ロシア語、タジク語、⑥東京フィルメックス（二〇〇六）。
『トゥルー・ヌーン』……① Qiyami roz／True Noon、②ノシール・サイードフ、③二〇〇九年、④タジキスタン、⑤タジク語、⑥ＮＨＫアジア・フィルム・フェスティバル（二〇〇九）、アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇一〇）。
『蜂の飛行』……① Parvozi zanbur／The Flight of the Bee、②ジャムシェド・ウスモノフ、ミン・ビョンフン、③一九九八年、④タジキスタン、韓国、⑤タジク語、⑥東京フィルメックス（二〇〇〇）。
『右肩の天使』……①Фаришта аз қитфи рост／Angel on the Right、②ジャムシェド・ウスモノフ、③二〇〇二年、④タジキスタン、⑤タジク語、⑥東京フィルメックス（二〇〇二）。
『ルナ・パパ』……①Лунный Папа／Luna Papa、②バフティヤル・フドイナザーロフ、③一九九九年、④ドイツ、オーストリア、日本、ロシア、フランス、スウェーデン、タジキスタン、ウズベキスタン、⑤ロシア語、⑥東京国際映画祭（一九九九）、劇場公開（二〇〇〇）、ＤＶＤ販売。

著者紹介

①氏名……岡田晃枝（おかだ・てるえ）。
②所属・職名……東京大学教養学部・特任准教授。
③生年・出身地……広島県。
④専門分野・地域……国際政治、旧ソ連地域。
⑤学歴……東京外国語大学ロシヤ・東欧語学科、東京大学大学院総合文化研究科・修士課程（国際社会科学専攻国際関係論コース）、東京大学大学院総合文化研究科・博士課程（国際社会科学専攻国際関係論コース）。

⑥職歴……東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム・助手、東京大学教養学部・特任講師、東京大学教養学部・特任准教授。
⑦現地滞在経験……ウズベキスタン（現地調査、三か月）。
⑧研究手法……政策決定者や外務官僚へのインタビューと現地で出版されている研究書や資料の購入が現地滞在時の主な活動である。
⑨所属学会……日本国際政治学会、国際法学会、ロシア東欧学会。
⑩研究上の画期……二〇〇七年のウズベキスタン大統領選挙。選挙監視団（ウズベキスタン政府招聘）の一員として参加し、この国で選挙制度がどのように運用されているか、市民が（ソ連時代と違う）選挙制度をどのように理解しているかを目の当たりにした。移行国の民主化の測り方について考察を深めるきっかけとなった。
⑪推薦図書……塩川伸明『民族と言語――多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』『国家の構築と解体――多民族国家ソ連の興亡Ⅱ』『ロシアの連邦制と民族問題――多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』、いずれも岩波書店、Ⅰは二〇〇四年、ⅡおよびⅢは二〇〇七年。三巻をセットで読んでほしい。
⑫推薦する映画作品……『コーカサスの虜』（原題『Кавказский Пленник』、セルゲイ・ボドロフ監督、一九九六年、ロシア）。

【エジプト】

革命とセクハラ
――エジプト映画『678』をめぐって

長沢栄治

最近のアラブ映画研究の進展は目覚しい。パリのアラブ世界研究所などには立派なフィルム・アーカイヴがあるし、また現地でも俳優や作品の一覧など映画名鑑の類の出版も目立って増えている。日本でもアラブ映画研究の博士論文を書こうという大学院生も出てきている。本来なら本稿の執筆も筆者ではなく、こうした新進気鋭の若手研究者か、あるいは、もし存命であったなら畏友、故高野晶弘さん（現代アラブ文学研究者、二〇〇四年六月没）にお願いすべきところであったろう。高野さんは以前、本誌の刊行